



臨床研究の教科書 研究デザインとデータ処理のポイント

川村 孝 著

B5 頁248 2016年

本体4,200円+税

[ISBN978-4-260-02497-6] 医学書院刊

評者 村川 裕二

帝京大附属溝口病院中央検査部教授

今どきの〈愛想のよい本〉ではない。

〈臨床研究をなぜやるか、どうやるか、ロジックは、統計処理は〉などを1cmの厚さにまとめている。

論文を10本書いた人が本書を開けば、自分の研究計画が杜撰だったとか、もっと理を詰めるべきだったなど思い至ることもあるかもしれぬ。しかし、多少でも研究の道を歩いてきたなら、自分の流儀が出来上がっていて、いまさらイチから習う気にはならぬもの。下手なゴルフを20年続けてきたのに、30回のレッスンを受けるために駅前のスクールに通う人は少ない。

このテキストは研究の入り口か、そこをちょっと過ぎた辺りの読者に勧めたい。たとえば、研究室の上司から「こんな研究を考えたかどうか」と〈おおざっぱな言葉〉で、〈それほど煮詰めてもないテーマ〉を提案された若手が購入すべきである。

このテキストはテーマを与えた上司にとっても研究の成り立ちを手取り足取り教えなくてすむので、手間が省けるメリットがある。

第1部は「研究の立案」、第2部は「研究の運営」、第3部は「データの整理と解析」。

第1部で臨床研究とは何か、おぼろげに理解できて

くる。何かの薬とプラセボをダブルブラインドで比較すれば一丁上がりだと思っている若者も「それなりに深い」と思うだろう。

第3部は〈統計解析の本を一冊読むのはつらいから、このくらい理解したらどうか〉ということらしい。統計処理の個々のものを詳しく論じるのではなく、その性格がどんなものかヒントを与えている。

第4部は論文の作法。brief and to the point。味がある。しぶい。

第5部は具体的な研究の経過やその後を述べている。この第5部が一番おもしろい。rejectされて別なジャーナルに送った経緯や、「肩こりに対する鍼治療の有効性」の研究で〈何がどうしてどうなった〉と、詳しく語られている。見たことがない趣である。

「ぴったりタイミングが合えば、ぴったりくるテキストである」が書評子としての結論である。そこまで成長していない人や、もう出来上がった人には向いていない。作法は初心者の上に学ぶべし。

最初に手に取ったとき、表紙の色やデザインが医学書院らしくないと感じたが、内容は装丁がどうであろうと関係がない本だ。